

■学校経営のポイント

学習方略を身につける

喜名 朝博

小学校の頃、新出漢字をどうやって覚えたか、学生たちに聞いてみた。最も多かったのが、ひたすら書いて覚える、次いで多かったのが熟語にして書いて覚える。「木＋ツ＋女＝桜」のように分解して覚える、成り立ちを覚える、見て覚えるという学生もいた。では、どうやって覚えたらいいかを習ったか、という問いに対しては、全員が記憶になかった。

学習方略とは何か

漢字の覚え方やノートの取り方など、効果的に勉強を進めるための方法を「学習方略」という。心理学では、「学習の効果を高めることをめざして意図的に行う心的操作あるいは活動」と定義される。

文章を読むときに、線を引いたり、マーカーで色を着けたりすること、書き込みながら読むことも学習方略である。問題解決の場面で、自分のノートをめくって既習事項を確認したり、数学的活動として図式化して考えたりすることも学習方略である。

魚の釣りを教える

「飢えている人がいるときに、魚を与えるか、魚の釣りを教えるか」という喩えは、教育界でもよく使われる。学校は授業のなかで様々な学習方略を経験させているが、教員も子どもたちもその意識は低い。カリキュラム・マネジメントは、内容的関連にとどまらず、学習方略の転移も含んでいるが、それを実践するには、高度な指導力が必要である。

子どもたちも、経験を重ねたり仲間の行動を見たりして、自分なりの学習方略を身につけていく。学習方略を確立している子、勉強の仕方を知っている子は、学力も向上する。逆に、学業不振の子どもたちは、理解力の問題だけでなく、学習方略を獲得していないことが要因となっているかもしれない。

学習方略の獲得

ベネッセ総合教育研究所の研究成果「小学校高学年の学びに関する調査2019」(右QRコード参照)では、学年が上がるとともに多くの学習方略が使われるようになることが明らかになった。「授業で書いたノートを読み返して復習する」(4年生:30.5%、6年生:51.7%)「何がわかっていないか確かめながら勉強する」(同、36.9%、53.2%)のように、メタ認知的学習方略を獲得していくようになる。

子どもたちのメタ認知との相関では、メタ認知が高いほど学習方略を活用していることも明らかになっている。メタ認知の高さは、何が分かっていないかを客観視する力であるが、学習方略においても、自分にあった学習方略を見出すために試行錯誤していることが予想される。

「学びに向かう力」としての自己調整学習

社会が加速度的に変化するなかで、学校で身につけた知識や技能はすぐに陳腐化していく。そこで、生きる力としての「学びに向かう力」の涵養が求められている。心理学的には自己調整学習と呼ばれるが、生涯にわたって自分で学ぶ力、学び続ける力である。

自己調整学習を支える3つの柱が、動機付け、学習方略、メタ認知である。日々の授業を通して、なぜ学ぶのかといった理解と学習への動機付け、学習方略の獲得、自らの学習過程を振り返る力を育てていくことになる。

学習方略を共有する

学びに向かう力の涵養を目指し、意識して学習方略を伝えていきたい。その際、なるべく多くの学習方略を示し、自らの認知方略に合ったものを選択できるようにしたい。その意味でも、学級全体で個々の学習方略を共有する場面を作っていきたい。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●校長・教頭のための学校経営手帳！《好評発売中！》

2024 スクール・マネジメント・ノート

教育開発研究所【編集】 A5 変形判／定価 2,750 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。

